



一九五二年、私は当時「日本のチベット」と呼ばれた岩手の北上高地の山あいに生まれました。五〇年代半ばごろ、当地では小児まひ(ポリオ)流行が社会問題になっており、広大な面積の町に医師数は絶対的に不足していました。

そんな環境の中、将来は医師になりたいという思いを持ちつつ、地元の中学を卒業。高校進学で故郷を離れることになりました。ところが、高校生活を満喫しすぎ大学受験を見事失敗しかし、この時の浪人生活が自治医大に入る大きな要因となったのです。

理想的な大学

東京で浪人生活に明け暮れていた七二年の秋ごろ。これま

へき地にこそ活躍の場

一度も手紙など書いて寄越しませんでした。来年、栃木県にへき地医療を担う医師のための医大ができるらしい。受験してみてもどう



岩手県立千厩病院を背景に同僚と撮影。右から2人目が遠藤院長

遠藤 秀彦 1期生、1978年卒

岩手県立千厩病院

【私の勤務地】千厩町は岩手県の北上高地最南端に位置する。新幹線一ノ関駅から二十五キロ、宮城県気仙沼の太平洋まで二十五キロ。ちょうど内陸と沿岸を結ぶ中間点にある。昨年のNHK大河ドラマで脚光を浴びた源義経が、鶴越(ひよどりこえ)の際にまたがったといわれる名馬「太夫黒」は当地の産。

か」という内容でした。高校入学前から地域医療を担う医師になりたいと思っていた私には理想的な大学ができたわけです。それは「自治医科大学」という名前でした。

当院では、この三年間で医師不足を理由に産婦人科、脳外科、小児科、整形外科と四つの科が休診しました。地方の中小病院の医師不足は歯止めが掛からず、深刻な事態に陥っています。

4科が休診に

たのでしょうか？ 答えは「否」です。

「存じのように自治医大卒業生は、卒後決められた期間、へき地勤務をすることが他大卒業医師と大きく異なる点です。私にとっては望むところで、生まれ故郷に戻る程度にしか考えず問題とはなりませんでした。一期生として卒業した後、岩手に帰りました。県内でも特に医師不足が深刻だった三陸沿岸・県北部の県立病院を大小計六カ所渡り歩き、二十八年が過ぎようとしています。現在は岩手県南部の千厩町(昨年合併して一関市)にある県立千厩病院百九十四床)の院長・外科医として働いています。

当院でも整形外科不在の穴埋めとして外科医が整形外科診療を補助することになりました。外科医は三人とも自治医大卒業生で、診療所や小規模病院勤務時代に整形疾患の診療経験が豊富。幅広い疾患に対応できるため、遠く離れた病院へ老人を通院させることだけは免れませんでした。

自治医大ができ、三十年余りですが、へき地医療は改善され

こういう時にこそ、地域医療を目指した自治医大卒業医師の活躍の場があると考えます。自治医大初代学長中尾先生が一期生卒業時、全員に手渡された「忍」一文字の色紙を院長室に掲げ、意を新たにしているところです。

(次回予定は広島県)